

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書

平成 27 年 8 月 26 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究所 共生人間学専攻

職名・学年 博士課程 1 年

氏 名 小川 陽香

印

助成の種類	平成 27 年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	第13回国際認知言語学会 The 13th International Cognitive Linguistics Conference		
発表題目	Where should Depictive Construction be positioned?		
開催場所	Northumbria University (Newcastle, England)		
渡航期間	平成 27 年 7 月 17 日 ~ 平成 27 年 7 月 27 日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。 「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	35万 円	
	使用した助成金額	35万 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	渡航費 184,000 円	-----
		学会参加費用 69,000 円	-----
現地滞在費 97,000 円		-----	
-----		-----	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 提出書類の説明に「Word(Excel)ファイルで送信」と書かれておりましたが、もし来年もPDF提出が可能なら「PDFも可」と一言付け加えて頂けると大変ありがたかったです。 その他の点では(応募方法や結果報告等の)手順も簡易で、余分な手間をかけることなく助成を受けることができ、学会に参加できました。本当にありがとうございました。		

成果報告書および成果の概要は、財団に郵送(あるいは持参)するとともに、Excel・Wordファイルでメール送信して下さい。メール送信分の印鑑は不要です。

平成 27 年度 京都大学教育研究振興財団

国際研究集会発表助成・若手

成果の概要

人間・環境学研究科

博士後期課程 1 年

小川陽香

会議の概要

今回私が参加したのは、イギリスの Northumbria University で開催された International Cognitive Linguistics Conference (国際認知言語学会) と呼ばれる、認知言語学の中で最も権威のある学会である。参加者は 570 人を上回る大規模なもので、これまで認知言語学を支えてきた海外の著名な研究者を始め、世界各国の院生・若手研究者も多く集まった。特に今年は “bringing together theory and method” というテーマが設けられ、認知言語学の理論全体を向上させるための目標が設定されていた。1 週間に渡る日程には、研究口頭発表・ポスター発表・ワークショップ・シンポジウムなどのアカデミックな内容に加え、著名な研究者とも交流を深められるエクスカージョンや院生同士の繋がりを広げるために設けられたイベントなども盛り込まれており、非常に充実したものであった。

その中で私は、Where should Depictive Construction be positioned? (描写構文はどこに位置づけられるべきか) というタイトルで口頭発表を行った。これは構文文法 (認知言語学の中でも主に文法を扱う理論) の立場から、描写構文と結果構文と呼ばれる形式上同一であるのに異なる解釈を持つ 2 つの英語の構文の比較を行ったものである。この理論では、人間個人が持つ言語知識は構文 (あらゆるレベルにおける形式と意味のペア) のネットワークとして表すことができるという立場に立つ。このネットワークの中で、形式が同一で解釈方法の異なる構文がどのように位置づけられているか、について述べたのが私の発表である。このタイトルにある問いに答える形で私が導いた答えは、コーパス (大規模テキストデータ) から抽出した用例を量的且つ質的に分析した結果、以下の 2 点にまとめられる。

- ① 描写構文と結果構文は構文ネットワーク内で直接的に結ばれていない。
- ② 描写構文の記述的研究には、従来のアプローチにとらわれて形式的同一性に着目するのではなく、意味的類似性に着目した分析が必要である。

今回の学会では描写構文を扱う同様の研究は見られなかったが、同理論を用いる研究者は数多く、非常に多くの刺激を受けた。

得られた成果

本学会に参加し、主に 3 つの成果を得たと感じている。まず、私自身の研究が前進したことがある。口頭発表後にコメントを頂いたり、学会中のイベントで知り合った研究者と話しをする中でこれまで気づいていなかった点を指摘して頂いたりした。それだけでなく、同理論・アプロー

チを用いた発表を聞き、これまでの自身の研究を振り返り、また新たな解決すべき問題点も明確にすることができた。

2つ目に、日本の認知言語学の動向の修正の必要性を感じ、進むべき方向を知ることができた。国内の認知言語学という名の下で行われている研究は、1900年代後半に同分野を開拓してきた主にアメリカの研究者の理論を用いて、言語現象を説明しようと試みているものが圧倒的に多い。しかし（今回の学会の参加者が各国の認知言語学者を代表しているとする）、日本と同様の研究はむしろ少数派で、心理実験を本格的に用いたまさに認知科学の一部として研究が多数であった。私自身英語の文法を研究しているため、国内の認知言語学においては中心的な研究分野に属している。しかし今後の言語学の行く末を考えるなら、近年発展している科学技術を駆使した心理実験等を積極的に行っていく必要があると実感した。

最後に、国際的な人脈を作ることができたのも大きな成果であると考えている。国内で行われる認知言語学会には、海外からの参加者はおらず、著名な研究者だけでなく共同研究を計画できるような同世代の研究者に会うこともできない。今回の学会では、先にも述べたように院生同士の交流イベントなども開かれ、同じ興味を持つ数多くの研究仲間を作ることができた。人文科学分野の言語学は共同研究があまり盛んではないが、心理実験などをより取り入れて行くためには世界的な共同研究がより必要となると思われる。

これら3点が本学会で得られた成果として挙げられる。今後自身の研究をより深めて行くために、ここで得られたものを十分に活用していきたい。

### 謝辞

本会議に参加し、国内では決して得られない大変貴重な経験を積むことができました。今後の博士論文の執筆に向けて、大きな一歩となっただけではなく、世界中の研究者とのネットワークを築くことができました。開催地が遠く、また円安などの渡航には厳しい状況が重なったため、京都大学教育研究振興財団からの助成金なしにはこの学会には絶対に参加できなかったと思います。心より感謝申し上げます。